
変態ですか?

かわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変態ですか？

【Nコード】

N9018S

【作者名】

かわ

【あらすじ】

タイトル通り、ぶっ飛んだ人とそれに振り回される人の掛け合い。

以前サイトに掲載していた作品です。3話から選択肢によって進むので、ご注意ください。

(この作品は「確かに恋だった」(<http://have-a-chew.jp/on|me/>)「のお題を複数お借りして作成しております」)

横断歩道は右見て左見てもう一度右を見て手を上げて、渡る。身を守るために、誰でも教わる基本的な交通ルールだ。

ああけれどどうして、身を守るための発展した対処法を誰かに聞いておかなかったのだろうか。

変態ですか？

電車が動き出すと同時にがたんがたとレールを噛む音が規則的に聞こえだす。

ドアと手摺の隙間に収まった湊は、押し合う人波の向こうに見えるガラス向こうの景色へ目を向け、車内から意識を逸らせた。正確には湊の真後ろに陣取り、腕を回してくる不届き者から己の意識を、けれどそれは不穏な位置で止まった腕にあえなく引き戻される。

「離してください変態」

「嫌だなあ、ただのスキンシップですよ湊」

「スキンシップじゃなくてセクハラです。義姉さんに言いつけますよ」

朝の混雑時にあたる今、腕を動かすことさえ難しい中で無理を通して理人の袖を掴んで排除を試みる。しかしその手は逆に捕らえられ、いいように弄られ始めた。

「ああすみません。スキンシップはやはり肌と肌を重ねてこそでし

たね。本格的なスキンシップ、今夜にでもいかがですか？」
つ、と指の付け根を掠めるように撫でた手を今度はこちらが捕らえ、甲の皮を爪先で強く擦ると、笑い交じりの声が唸りに変わった。ついでに靴の踵で奴のそれをぐりぐりと踏みつけながら、湊はどうしてこんなことになったのかと溜め息が落ちるのを取られなかった。

始まりは兄の結婚話だった。

定年を迎えた両親が世界旅行と称し放浪の旅に出てから、湊は年の離れた兄と二人で暮らしてきた。その兄が家へ連れて来た女性と結婚を考えていると聞かされた時、湊は素直にその話を喜んだ。けれどそこで問題が一つ、兄が別地方へ転勤することが決まったのだ。その後設けられた、顔合わせ兼、湊の身の振りを話し合う場で引き合わせられたのが件の変態、佐山理人だった。

「だから、一人暮らしくらいちゃんと出来るって」

「そうは言うけど、何かあってからじゃ遅いだろ。それに、ここから高校まではちょっと遠いんじゃないか？」

「そんなことないよ。第一母さん達がいつ帰ってくるかわからないんだから、家を空けるわけにもいかないでしょう」

平行する話し合いを終わらせたのは、巡り巡って義兄となる男の一声だった。

「なら、俺が保護者として湊さんと同居する、というのはどうでしょう」

一重の目元を優しくに細め、人好きのする笑みを浮かべた男はともも現在の変態と同じ人とは思えない爽やかさでそう言った。

それからスムーズとは言えないがそれ以上の良案も浮かばず、湊と理人との同居が決まった。最後まで不満げだった兄も、期日に追

われ転勤先へ旅立った。

殆ど知らない大人との共同生活における不安も、上手く折り合いをつけることで杞憂となった。常に穏やかに接する理人という人間へ向けられる信頼や好意は、日を重ねるにつれ確かなものへとなっていくはずだった。

「…はい？」

「ですから、どうやら俺はあなたを気に入ってしまったようだ」とどさくさにまぎれて頬を撫でる指は、素直にその好意を受け取るのをためらうに十分な意図を含んでいた。

どう返すべきかと思案する湊に、理人はあの時の人好きのする笑みを浮かべて湊の背を緩く抱き込んだ。

「あなたのその困惑したまなざしを向けられると、どうしようもなく気が昂るんです」

「……………」

にこやかに告げる理人へ反射的にアッパーを食らわせた湊は、一転足元にうずくまる男を混乱したまま見下ろす。

「……………く、くつつかないください、移ります…。変態が」

そう告げた湊をそれでもにこやかに見上げて来た義兄への認識を、好青年から変態と書き替えたのは無理もないことだっただろう。

カシャ、という音で湊は回想から呼び戻された。

何の音かと辺りをうかがえば、変態もとい理人がいそいそとデジタルカメラを鞆にしまい込むところだった。

「…盗撮が犯罪だって知ってますか？」

「すみません、義兄への近況報告と一緒に送ろうと思ひまして」

じと、と不快気に目を向ける湊へ、心配せずとも俺個人でどうしようなんて考えてませんよ、などと告げる。そんなことをする男ならとうに兄へ訴え出ていると言うものだ。そうしないのは、これま

で過ごした時間の中で理人へ最低限の信用は置けると判断したからだ。

そう、もう少しこの男が度を越した変態であれば、遠慮なく同居解消を申し出る事ができるのだ。顔を合わせれば不穏な発言ばかりを繰り返しているが、喚き立てるほどいきすぎた行為を仕掛けてはこない。

性質の悪い冗談として受け取ってしまったえば、どうしても慣れない土地で奮闘しているであろう兄の手を煩わせてまで同居を解消を申し出る理由にはならなかった。

「湊？」

とはいえ確実にストレス指数が上がっていく中、この問題とどう折り合いをつけるかを考えれば深い溜め息を吐かずにはいられなかった。

「そろそろ戻って来てくれないと、さびしくて何をするかわかりませんよ？」

「他に言うことないんですか？」

湊が思わずといった風に片手に顔を埋め呟くと、理人は少し考えたあといつもの笑顔を浮かべた。

「湊が望むなら、俺はいつだっていけますよ」

「……何がです？」

「食べちゃうぞ、ってことです」

「食べちゃうぞが冗談に聞こえませんか！というか、自重してください変態！」

つい聞き返してしまった寸前の己を激しく呪いながら、前方に見つけた学生の群れへ向かって足を速めた。

その場に残され鳩尾を抱えて蹲りつつかけた声に律儀に返った「イッテキマス」の一言に、理人の口元が嬉しげに緩んだ様を、背に向けた湊が目にする事はなかった。

02 (前書き)

選択肢有。わかりづらくてすみません。

朝のあいさつが交わされる、ありふれた日常の光景。それぞれ気の合う仲間同士で集い、昨夜のドラマ、バイト先の騒動、ファッションセンスの如何と聞こえてくる会話は途切れぬ。それが善きにしる悪きにしる、彼らは彼らの好奇心の赴くままに言葉を紡いでいく。

「で、何してたんだよ朝っぱらから」

「…ノーコメント」

「逆に気になるだろ。いいから吐けよ」

おもむろに息を吐いた湊に構わず、隣に立った級友は更にせっついてくる。何故自分の周りには我が道を行く人種が多いのかと思わずにいられないが、嘆いたところで彼らがこちらを慮ってくれるわけではない。

「…そもそも誰のことを言ってるのかわからないんだけど」

「お前が道の真ん中で殴ってた奴、うちの司書だろ。大学の方の」

「人違いだよ」

「お前嘘へたつくそだなー」

ぐっと詰まった湊は相手がやはりと言うか引かないことを悟り、当たり障りなく「常識じゃ出てこない言動に、つい手が出た」とだけ伝えた。障りがあるのは理人との関係だ。あんな変態が義理とはいえ兄であるなど、精神衛生上誰にも知られたくない。

嘘ではないが歯切れの悪い回答にまだ質問したそうにしていたけれど、タイミングよく現れた担任を口実に、湊は理人には決して見せないような満面の笑みで級友を自席へ戻るよう促した。

湊の通う高校では制服以外に自由な服装で過ごすことが許可されている。それまで制服に縛られてきた若者は各々好きな服装を楽しんでいる。それは勿論、体育の授業中も例外ではない。

黄色い声と黄土色の声がグラウンドの左右から聞こえてくる中、湊は膝に肘をつけて中庭にある樹を何とはなしに見ていた。体育があることをド忘れし運動用の着替えを持って来なかったので仮病を使ったものの、時間を持て余しているのだ。

背の高い樹の向こうにはその葉に隠れるように書棚の並んだ部屋が見え、つられるように先ほどの会話に出てきた変態司書を思い出して眉根を寄せた。校内に大学図書館司書を知っている人間がどれだけいるかは知らないが、彼と関わりがあることを周囲に知られたくない以上、今後は別々に登校するのが妥当だろう。泣き落としをかけられようが腹の立つ変態独自曲解論を繰り返されようが、背に腹は代えられない。そう静かに決意する湊の肩へ不意に誰かの手が触れた。突然のことにびっくりと身を竦ませながら振り向くと、今まさに脳裏に浮かべていた忌避対象がニンマリと口元をゆるめて立っていた。

「何してるんですか」

「それはこっちの台詞です。あなたの職場はここじゃないですよ」
言いながら勝手に隣に座りこんでくる理人に不快を隠さず顰め面を作る。

「お使いできました。こちらに入る本がうちの方に紛れていたのだから……それは、お手数おかけしました？」

いいえ、とにこやかな笑みと共に返ってくる返事は至って常識的だ。

目の前にはボールに翻弄されるクラスメイトたち。本当なら、こんな状況で理人と会話することは避けたいところだが、出会った当初のような爽やかさと常識的な言動に、つい振られる話題に返事をしてしまう。普段の二人きりの時には考えられない穏やかな空気を作りだした男がいつもこっぴどであれば湊の心労もはるかに減ることだろう。

けれど、でも。

何か違う、何か、物足りない。そんな違和感が拭えない。

「湊？」

どうかしましたか、と屈みこんで来る理人。普段はからかうように細められるそれが、今は別人のように真摯な色を乗せていることに、どうしても違和感が消えない。

「え？」

「なんか違う。なんだか、…大人しいとなんだか寂しいです」

湊、と戸惑ったような理人の声に、はっとして湊はあわあわしながら前言を撤回する。何がどう寂しいのか、自分で自分がわからなくなつた湊の耳にホイッスルの音が届く。集合の合図だ。

動転したまま教師の元へ行こうとした湊は、けれど腕を取られてたたらを踏む。己を引きとめた相手へ振り返ることができないでいると、不意に伸びてきた手に頬を押されて後ろを向いた。自分が今どんな顔をしているか全くわからない湊の目に、満面に笑みを載せた理人が映る。そして

「今度くるときは、短パンから伸びる湊の生足、ぜひ拝ませてくださいね」

楽しみにしています、と続けられた言葉が徐々に浸透し、湊は己がからかわれていたのだと理解した。

「こ…の、ド変態!!」

大音量で発した罵声は校庭に響き渡り、昼休みに体育教師に呼び出されて説教を受ける羽目になつたのだった。

「失礼しました」

体育教員室の扉を閉めた湊はげっそりしていた。

自分の発言が招いたこととはいえ、何があつたかありのままに伝える訳にもいかず上滑りするだけの言葉の受け答えをするだけで相당한気力を費やした気がする。そして何より一時とはいえどうしてと問わずにいられないあの時の己の思考が湊を苛んだ。

何が寂しいか。きつと気のせいだ、魔が差したんだと繰り返し念じてどうにか立ち直ろうとする。

「…そう、気のせいの気のせい。気のせいでした。うん」
口に出して無理矢理思考を閉めくくった。
心なし俯いていた顔をあげ、教員棟を出た湊は

- ・ 教室へ続く廊下へと向かった 次の話 × 1 0 3 - 0 1 へ
- ・ ふと、図書室に行こうと思った 次の話 × 4 0 3 - 0 2 へ
- ・ 空腹を満たしに売店を目指す 次の話 × 7 0 3 - 0 3 へ

03-01(前書き)

教室へ続く廊下へと向かった

週末の午後、一時間だけある授業は教科学習ではなく学活のみだ。年度もそろそろ終わるこの時期に話題に上るのは、第二の文化祭とも言える通称？掃出祭？の出し物について。何度聞いても酷いネーミングのこれは、最上級を除く全校一体となって卒業生を追い出す、もとい送り出す送別会だ。文化祭と違うのは一般参加の不可と非常に低予算なこと、生徒だけでなく教員も参加することだろうか。比較的自由な催しが許されているせいか、文化祭時より若干ではあるが級内の意思疎通はスムーズだ。この様子なら一人くらい傍観していても大丈夫だろうと窓の外を見ているうちに眠り込んでいた湊は、気付けば給仕役を割り当てられていた。クラスの出し物は闇鍋喫茶という、提供する側もされる側も微妙な気持ちになる企画だった。

憂鬱な気分のまま給仕役の話し合いを終えた湊は手早く帰り支度を終え教室を出た。向かうのは先程外から眺めていた図書室だ。

兄との生活で家事全般を担っていた湊だが、現在の同居人の好みに合わせた料理の勉強をし直しているのだ。非常に認めたいが紆余曲折の末理人に養ってもらっている以上、こちらもそれなりの対応をしなければ居心地が悪いと始めたのだが、意外に嗜好に合ったそれを今では進んで本を読みあさっていた。

図書室への最後の角を曲ろうとして、聞き覚えのある声がすることに気付いて足を止める。そっと覗くと、変態大学司書と朝から湊を疲れさせてくれた級友が立ち話をしていた。どうしてここに、何故二人が。疑問は尽きないが、目下問題は二人を挟んだ先に湊の目的地への扉があることだ。関わりたくない二人の横を、何食わぬ顔で素通りするのはあまりに不自然だろう。

しばらく考えりスク回避を優先した湊は静かに踵を返した。しか

し。

「奇遇ですね、湊」

計ったようなタイミングでかけられた声に思わず渋面になる。無視しようとも思ったがその後のことを考え渋々振り返った視線の先には、にこやかに笑む男が一人。

「こんなところで何してるんです？あなたの職場はここじゃないですよ」

「やっぱり湊は可愛らしいですねえ」

「その笑顔、怪しすぎです。引つ込めてください」

「照れ屋さんなところも素敵ですよ」

いつものことながら成り立たない会話に長い息が零れる。そんな湊を見て理人はいつものように目を細めた。

「そう言えば、彼は？」

「彼？」

「図書館で知り合ったみたたく聞いたんですが、違いました？」

ああ、と思い当たった様子の理人は、けれどきよんとする湊に、これまたいつものようにニンマリと口元を緩めて見せた。

「いやだな湊。覗かれないなんていけない人ですね」

「どこをどう聞き間違えたんですか！」

憤懣やるかたない湊へ心の声が聞こえましたと平然とのたまい追い打ちをかけるが、もはや言葉もない湊に笑みを改める。

「彼はこれから部活だそうですよ。この廊下は部室への近道だとか」

「…そうですか」

やっと得た返答にようやく一言返しそのまま理人へ背を向けると、不思議そうな声がかかった。

「ちょっと疲れたんで先に帰ります」

振り返りもせずそれだけ行って足を進める湊へ、寸間置いて再度理人の呼び声がかかる。今度は何かと緩慢に振り返りかけた額に、小気味よい音を立てて何かが当たった。

「すみません、大丈夫ですか？」

慌てて駆け寄って本心からすまなさそうに謝られ、湊は出かかった不平を喉へ押し戻す。自分のものより大きな掌が前髪をよけて額をさするのを手を掴んでやめさせた。

「大事な湊の額が。キズモノにした責任はきつと取りますから」

「…もういいですから」

意識しいて作った笑みは固かったのですぐに伏せ、落ちた何かを探す視界はけれど先程まで湊の額に触れていた掌に遮られる。

そこにはフアンシーな装飾紙にくるまった飴玉が一つ。

「はい。疲れた時には甘い物ですよ、と言つつもりだったんですが、そう言っただけで珍しく苦笑する男を見やりながら、湊は差し出された飴を包み紙を解いて口に入れる。ほんのり広がる甘みと少しの苦味を感じながら、もう一度目の前の苦笑を見上げる。>食べ物を投げな、とか、疲れさせているのは誰だ、と言っただけでやりたいことは多々あったが、笑顔ににじむ反省を読み取った湊はそれらを礼と一緒に呑み込んだ。

「…鶏の煮物は好きですか？」

「はい？」

「鶏です。夕ご飯、さっぱり煮にしようと思って」

突飛過ぎただろうかと、理人の反応の無さにそう思い始めるも、思考は唐突に回された彼の腕に寸断された。

「な、なんですか…！」

「転んだら危ないと思って支えていたんです」

「…はあ」

明らかに意味のわからない言い分に、せめて一体どちらを支えていたつもりなのか突っ込むべきか逡巡する。けれど。

「ありがとうございます、大好きですよ、湊」

普段の…比較的まともな時の理人の声音が静かに降ってくるのを聞き、意図がきちんと伝わったことを悟ると、目の前の布地に触れるか触れないかのところで黙ったまま頷いて返した。

いつも同じような言葉や手段でからかわれてはストレスをためて

いるものの、決定的に理人を嫌いにならない理由はこんな些細なところだ。些細で、どこか兄とも通じるような決め切れない不器用さに、ついほだされてしまう、とでも言うのだろうか。

いつもなら理人の前では決して見せない笑みを、どうせ見えないだろうと気を弛めたせいかな湊は無意識にか小さな作りの顔に浮かべていた。

「ああ本当に、食べてしまいたい」

ほそつと呟かれた言葉にそれまでの緩やかな空気が凍りつく。

その後大音量で響いた怒声を聞きつけた教員が再び説教を始めるのを、元凶となった男は困ったように眺めていた。

03・01(02)(前書き)

教室へ続く廊下へと向かった(02)

「アレが輝いて見えるのは何故ですか」

湊が入浴を終え、リビングに戻れば目の前には先程まではなかった異様なブツがぶら下がっていた。

予期せぬことに呆然とする湊を待っていたのは、いつも以上に変態的な笑みを浮かべる同居人だった。

「掃出祭の際、是非着て貰おうと思ひまして」

「……」

湊ならきつとどちらも似合うでしょうね、などと言いながら両手に提げたソレ等をそれは楽しそうに変態は見比べた。

「ナース、いやセーラーも捨てがたいですね。湊はどちらがお好きですか？」

拒否反応から聞き流していた、アレを着るのが誰か、ということさらりと質問に乗せて突き付けられた湊は、本日一番の深い深い溜め息を吐いた。

「絶対着ませんから、絶対！」

「メイドの方が良かったですか？」

「そう言うのは可愛い女の子が着るモノです！」

……ではなくて。何より問いただしたいのは。

「昔ながらの体操服もありますよ」

どこで入手したのかは聞きたくないのでもいい。何故ソレ等を湊へ着せようと目論んだというのか。まさか妄想の末の暴走かと危惧したが、けれどそれは杞憂に終わる。決して歓迎できる理由ではないとは言えど、暴走よりは幾分ましだ。

放課後、その日二度目に予期せず理人と遭遇する直前、彼は湊のクラスメイトと話した際に彼らのクラスの出し物を聞きつけたのだと言う。既知らしい彼らが話題に上げるに不思議はない内容ではあるが、その後湊には到底理解できない理人お得意の変態独自曲解論

を展開し、数着のコスプレ衣装展示がリビングで行われてるに至ったようだ。

普段なら溜め息と苦言で済ませる湊だが、これについてはそれで終わらせることができなかった。何故なら、長年家計をやりくりして来た者として、度を越した浪費は許せるものでは無かったからだ。

翌日、朝食こそ用意されていたものの湊に先に登校された上、湊によって不要の烙印を押された品々をリサイクルショップへ持っていくことを約束させられた変態もとい理人が、己の行動を反省したかどうかは定かではない。

03・01（おまけ）（前書き）

教室へ続く廊下へと向かった（おまけ）

03・01（おまけ）

「湊？こちらですか？」

帰宅後、いつもなら聞こえるはずの湊の声がしない。どうかしたのかとキッチンを覗くと、こちらに背を向けた湊の肩が小さくはねるのが見えた。

「どうもしないです。おかえりなさい、すぐご飯にしますから先にお風呂はいつちゃってください」

「湊、こちらを向いてください」

頑なに背を向け続ける湊を少し強引にこちらへ向かせる。

「あ、あの」

「ああ、そんなに泣かないでください、理性が保てなくなる」

「あなたが理性的だったことがあるんですか！」

湊は大きくもないが小さくもない、けれど印象的な瞳を涙で潤ませて見上げてくる。それへ思わず理性が負けた。

「ちよっ！何すんですか変態！」

こう言う時に下手に言い訳をすることは湊へは逆効果だ。その代わり、俺はいつもの調子でいつものように返す。

「誘っているように見えたので、つい」

「何がですか！あなたの頭にはそう言うことしか入ってないんですか！？」

「そんな誤解です。でも」

「…でも？」

いまだ涙の止まらないらしい瞳が俺を睨みつけてくる。その様さえ心底愛らしいと感じる。

「湊に泣かれてしまうと…大いに興奮しますね、もちろんそういう意味で」

「…この、花粉症になってしまえ変態！」

「ああ、だから涙目なのです。涙をかむ際はぜひ一声掛けてくだ

さいね、喜んでお世話いたします」

「コスプレ服といい、どこまで変態なんですか…」

やや疲れた風に呟く湊へ追い打ちとなるだろうことを敢えて聞かせる。

「湊ならどんな格好でも歓迎ですが、そうですね。ミニスカートは好きですよ、脚が見えますし」

「何があつても穿きませんから！そういう女性を追っかけてください変態！」

「脚が見えなくとも、この指先がネギ臭くとも、大好きなんですあなたのことが。だから、いいですよね？」

握っていた包丁をさりげなく置かせて取った指先を己の手で包み込む。家事を一手に担ってきた湊の手は柔らかさより手荒れのかさつきの方が印象に残る。その手を労わるつもりで撫でさすると、顔をひきつらせた湊がものすごい勢いで自身の元へ引き寄せた。

「何がいいもんですか。作業が進まないから、とつとどつかへ消えてください！」

怒り心頭。まさにソレな湊はいつものように俺を足蹴にし、キッチンから追い出した。

こつ言つことは本当に嫌がつている癖に、相手を無視することはできない。そんなお人好しな湊をついついからかい過ぎてしまうのはもはや他には代えがたい俺の生きが이었다。

03・02(前書き)

ふと、図書室に行こうと思った

決して充実しているとは言えない高校の図書室へ向かいながら、湊は先ほど理人が言っていた、あちらへ紛れていたという本に思いを馳せていた。図書委員ではない湊はどんな本が入るのかは知らなかったが、もしリクエストに出していた本であったら、と思うと確認せずにいらなかった。

けれどその浮き立った気分は図書室の扉をあけた瞬間見事にしほみ、咄嗟に扉を閉めて見なかったことにした。

「やあ湊、奇遇ですね」

見なかったことにした、否、したかった対象がかりと扉を開け、湊をみとめてほほ笑んだ。どうあっても幻覚になってはくれないらしい理人に招かれ、現実拒否を諦めた湊は図書室の扉を潜った。

「…あの、にこやかにスキップしないでください」

「せっかく二人きりなのですから遠慮なさらず。さあ」

何がせっかくなのか全く理解できなかったが、理人が引いた椅子に促されるまま座って室内を見回した。見る限り室内には本当に湊と理人の二人だけのようで、理人の奇行が人目に触れずに済んだことにひとまず安堵する。

こちらを見てほほ笑みながら隣に腰を下ろした理人へ向けて、気になっていたことを訊ねた。

「どうしてここにいますか？あなたの職場はここじゃないですよ」

「ああ、もうじき掃出祭があるでしょう。出し物の準備がなかなか大変なようで、この時期は大学側から一人手伝いに来るのが慣例なんですよ」

今年が俺が引き受けることになりました、と本人は言うが、にこやかに立候補する理人が容易に想像できた湊は乾いた笑いを零した。

今ここに理人がいると言うことは、掃出祭というあんまりな名の卒業生を送る行事が終わるまでこの状況が続くのだろう。ますます登校時の別行動を徹底しなければ、と決意を新たにす。

「ところで湊、本日はどんなご用でここに？探しものなら手取り足取りお手伝いしますよ」

「消えてくれませんか変態」

伸びてきた手が肩に触れる前に椅子から立ち上がった湊は、勝手知ったる図書室内の料理の関連コーナーへ向かった。背後から聞こえてきた不届きな呟きは湊の精神衛生上なかつたことにして静寂を保った。

二人きりの広い空間に聞こえるのは湊がページをめくる音、どこかでふざけ合っているのだろう生徒達のざわめき。そして時折背の高い樹を挟んだ向こうからも微かに笑い声が響いてきた。

そんなありふれた日常の穏やかさに浸りながら、湊は興味をひかれたページを熱心に読み始めた。

「いいですねえ、おいしそうです」

「うわっ！」

突然後ろから声をかけられ、半ばその存在を忘れていた湊は盛大に心臓を暴れさせた。

驚きに目を見開いた湊を見返す理人の顔にも、珍しく笑顔ではなく驚いた色が強く現れている。

「どうしました？挟まって潰れた蜘蛛でも見てしまいましたか？」

あれは気持ち悪いですからね、と明後日の方向ながら実感を込めて言う理人に不注意を詫び、湊はあわてて場の空気を繕うように話題を戻した。

「ビーフシチュー好きなんですか？和食の方が好きなんだと思ってました」

少々早口になってしまった湊に一度だけ瞬いた理人は、それ以上何を言うでもなく湊の問いにいつものように笑みを浮かべて返してくれた。

「ええ、和食が一番好みではあるんですが。煮込み料理なら大抵は好きですね」

湊の挙動不審に気付かないわけがないだろうに黙って話を合わせてくれた理人に、今まではあまり抱くことの無かった照れくささと少々の感謝からか、湊は自然と顔に笑みが浮かべた。それを見た理人の笑みもいつものものより柔らかくなったように感じた湊は自然と柔らかく言葉を紡いだ。

「なるほど。そう言えば肉じゃがなんかも嬉しそうに食べてくれますもんね」

「ええ。湊の料理はどれもおいしいけど、あれは格別ですね。自分好みに仕上がるまでじっくり煮込まれるのを待つ時間もいいエッセンスにもなりますし」

「…？料理、するんですっけ？」

最後の言葉が引つ掛かって訊いた湊へ、理人はいつもの様に笑んで返すだけだった。

「ところで、今日の夕ご飯は何でしょう？」

何か釈然としないものを感じながらそれが何かも分からない湊は、とりあえずはとを考えていた献立を口にした。途端嬉しそうに顔をほころばせ、楽しみにしていますと返す理人に、くすぶる疑問はさておいて湊も同じような笑みを返したのだった。

いつになく湊にとって穏やかに過ぎた時間に不思議な充足感を味わっていたが、時計を見れば休み時間はもう残りわずかだった。湊が手にしていた一冊の貸し出し作業を頼むと、しかし理人はニンマリと笑みながら何故か両手を横に広げた。唐突に過ぎるそれへ首を傾げた湊に、理人はさも当然のようにこう言った。

「どうぞ飛び込んでらしてください。その愛、余さず受け止めさせていただきます」

「お断りします」

「何故です、愛し合う二人なら当然でしょう？」

咄嗟に返した湊へさらに間髪入れずに重ねられた変態独自曲解論

に開いた口がふさがらない。

いつも以上にわけのわからないそれへ抗議せずにはいられなかった。

「発想も切り返しも明らかになんか普通じゃないんですが！」

「いいじゃないですかそんなこと。さあ遠慮せずに飛び込んでくれてかまいませんよ、湊」

「お願いだから遠慮させてください！」

再び咄嗟にそう返したものの、そうじゃないと思いなおす。

「じゃなくて、何をどうしたらそんな考えになるんですか」

「今の流れ上自然なことだと思っただのですが。残念です」

「私にはあなたの頭の方が残念です！」

駄々っ子を前にしたかのように落とされる無念そうな溜め息に、湊の方こそ諸々に対し残念だと言いつ返したい。これでは変態が本性を現して以降初めて味わった穏やかな空気が台無しだ。

そんな非常に言葉にしがたい空気の中響き渡った間の抜けたチャイムに促されるまま、ゲンナリと肩を落として湊は教室へ戻っていた。

03・02(02)(前書き)

ふと、図書室に行こうと思った

「こんなもんかな」

中まで味が滲み込んだのを確認し、湊は茶色の鍋に蓋をした。

次いで料理用具を片付けていると家主が帰宅を告げる声が聞こえた。一応は家主の彼を出迎えるために玄関まで行ったもののそこには誰の姿もなく、空耳だったのだろうかと訝しみながらキッチンへと来た道を逆にたどる。が、その途中、湊は無人の筈だった部屋の扉が開いた男と出くわした。

呆気にとられた風の湊へ、男はニツコリ笑って再び帰宅を告げた。「って、どこから入ってきてるんですか」

「鍵を忘れたようなので、窓から」

「常識的にチャイム押すって選択はなかったんですか！」

思わず荒げた声にもめげない男に、セキュリティシステムを万全にしておかず良かったのか悪かったのか真剣に悩みかけた。近いうちに兄に相談を持ちかけようと日取りを計算しつつ、そう言えば挨拶を返し忘れていたことに思い至った。

「お帰りなさい」

湊が言うと、仮不法侵入者は笑みを深くして湊を見つめた。

「あ、お風呂早めに沸かしたんで先にいただきました。ご飯ももう食べられますけど、どっちを先に済ませます？」

「湊、一つ選択肢が抜けていますよ」

まるでお芝居のように笑顔から真剣そうな顔へ表情を入れ替えた理人を、けれど湊は感心するよりも先に呆れを隠しもせず面に出席す。

「何度言われても無駄です。叶わない夢は今すぐ捨ててください」

「いいえ、俺はただ男のロマンについて研究しているだけです。湊の口から聞いてどのくらい理性が保つか実験しましょう。さあ」

「埋まってください変態」

もはや習慣となりつつある深い溜め息を腹の底から吐き出した湊と、その原因である笑みをたやさない理人の一日は今日も恙無く繰り返されたのだった。

後日、久々にかかってきた兄嫁からの電話口で、心配をかけないようにと普段は気を付けていた理人の変態活動の一つをつい口にしてしまった。

おおらかに笑った義姉は弟の不法法を詫び、湊へも防犯意識をしっかりと持つようにとの注意を与えた。そして何より何気なく始まった義姉の昔語りから理人の幼少期の恥ずかしい失敗談を得た湊は、変態発言の抑止に活用することを決め大いに喜んだ。

思惑の穴に気付かずそれを実行した湊が、常人の感性を理人に期待したことが吉と出るか凶と出るかはまだわからない。

03・02)おまけ(前書き)

ふと、図書室に行こうと思った

03 - 02 (おまけ)

大学時代からその友人が変わっていたことは知っていた。その時はそれも個性と特に意見することはしなかった。

けれどそのツケが、今更やってくることになるなんて誰が予想できたんだろうか。

「それは自業自得なんじゃないか？」

「失礼な。大体元凶の姉はいつも電話中で捉まらないし」

「…いつ電話しても話し中ってそれ着拒だから、多分」

たまの週末、久々だからと呑みの誘いに乗った数時間前の自分を今更ながら恨めしく思う。週末と言っても友人らの休みがあまりかぶらない。そのため予定が合えば基本的に誘われれば断らないことにしていた。が、やはり相手はよく選ばなければ楽しい呑み会も苦しい我慢大会になるようだ。

…いつの間にか、俺以外のメンツはうまく逃亡を図ったようで姿が見えない。俺は完璧に出遅れた。

「仕方がないので今日付けで着くように届け物を出してきました」

「へえ…で、何で？何送ったんだ？」

「バラの花束です」

花束？しかもバラの？

人が好く見えると評判の笑みを惜しげもなく晒して首を傾げる様はこいつがやると酷く絵になる。ただし、うつすらとにじみ出る腹黒さにさえ気づかなければ、だが。

この裏のある笑みを毎日向けられているだろうに、全くと言っていいほど絆されていないらしいミナトちゃんもなかなかのものだ。

「えーと、一応言っとくけど、バラの花束贈っていいのは二次元の住人だけだからさ」

「ふふ、二次元的ベターな展開を期待してのことですから」

「は？」

ニッコリとそれこそ二次元の王子のような笑みで意味不明な発言を放つそいつに視線で補足を求める。すると奴は笑みを更に深めてそれはそれは楽しそうに説明してくれた。

「実は今日、姉の誕生日なんですよ。姉夫婦が結婚して初めてのお祝い事なのできつと義兄も張り切ってプレゼントを用意しているでしょう。身内鼻眞の気はあるかもしれませんが、義兄は姉にベタ惚れですからね。それはそれは奮発していることでしょうね。会社帰りに綺麗な箱を持ってうきうきと家路を辿る義兄の姿が目につかぶようです。姉も姉で、鈍くも忘れっぽくもない人ですから、きつと普段に輪を掛けて楽しんで料理の腕をふるっていることでしょうね。あぁなんて理想的な家庭でしょう」

うんうん。俺もそんな家庭を築きたいものだ。相手も絶賛募集中だ。

「そうはいかせません」

内心想像を膨らませていた俺を現実に呼び戻したその声は、その…、それまでよりずっと…黒かった。

「俺と湊の艶めく生活を邪魔しておいてただでは済ませません。今は義兄より派手な品が届いて最高のシチュエーションに水を差していることでしょう」

気のせいかな悪魔的なオプシオンが奴の背後に見え隠れしている…。「これまでは目が合うと視線を伏せて可愛らしく照れていたのが、この頃は笑いをこらえるしぐさをするんですよ。ただでさえ平静ではいられなかったというのに、今では湊を見つめるだけで胸が痛くなってくる始末です。全く、余計なことをしてくれたものですよ」そしてこいつ流照れ隠しのオンパレード、と。ミナトちゃんは完全にとぼちりだ。「見つめるだけで胸が痛い」か、相手はさぞ頭が痛いだろうよ、本当。

「取り敢えず、目を逸らされるのは照れからじゃないって気づこうね。流石にそれは誤解したままじゃ痛すぎる」

「…さつきから思ってたんですが、君、友人にかけるのにもっと相応しい言葉があると思いませんか？」

不満そうなのにつに、俺はと言えば呆れた視線しか向けられなかった。一体どんな言葉を求めてたんだ。まさか肯定的な相槌とか好意100%のアドバイスとかか？無茶言うな、どうしようもない愚痴につきあうだけで俺の誠意はすっからかんだ。

「強いて言うなら、もうちょっとミナトちゃん労わってやれよ、てところかな」

「……………あ？」

無理矢理ひねり出したアドバイスもどきに返ったのは、これまでの内容の特異性さえ無視してしまえば耳に心地よい音域の声より一段低い、というか、若干ドスの効いたような…なんというか、こいつがこう言う声を出すと冗談抜きで怖いんだが！

「軽々しく湊をミナトちゃんなんて呼ぶな汚らわしい」

「い、ごめん。てか、その、じゃあなんて呼んだらいいんだよその子」

声と同じく剣呑さを増した視線に射すくめられながらなんとかそう返すと、奴は束の間考えこう言った。

「敢えて名前を呼ばなくとも、俺の最愛のパートナーのことなら、それとなく察します」

お前はどこのデンプだ！…じゃなくて。

「彼女でもない子にそれか！？」

「彼女だなんて誰がいつ言いましたか」

「ちょおおおおおと待て！それは何だっ？ミナトって子はすでにお前の毒牙にかかっちゃまったのか？それともまさか男に懸想してるのか！？」

「湊を狭苦しい性別の枠にはめようなんて、そんな小さなことを論じる事態間違いです」

「じゃあお前はなんなんだよっ？正真正銘男だろ！？昔から！」

「おっと失礼、湊から電話だ」

ホントに失礼だなオイ！せめて俺の了承を、いやいや、問答の回答を提示してから出るよこのミナトちゃんバカめ！

隣で憤慨している俺に一切構わず携帯に話しかける奴は面白いほど笑顔が全開だ。それに毒気を抜かれたわけではないが、せめて電話が終わるまで大人しく待っていてやるう。…正直、あんな呼び名一つで怒りだすほどこいつが執着してる子との会話を邪魔する方が恐ろしい。

そんな悟りを開いていると、電話を取った時と打って変わって慌てたような声が響いた。

「え、姉さんに呼ばれたって…ここからは距離が…」

なんだなんだ？さりげなく奴の持つ電話へ耳を近づけると、随分とうきうきした感じの声が聞こえてくる。が、肝心の性別は電話越しのせい不明瞭すぎてわからない。どっちなんだ。

「いえ、食事の心配ではなくて…え、賞味期限？俺は来るなって、そんな湊…湊！？」

何度も電話口に向かって名前を呼んでる。察するに、切れたな、これは。

と、奴はガタンと激しい音を立てて立ち上がると、見たこともないほど必死な形相で財布を取り出した。

「すみません、急用ができたのでこれで！埋め合わせは期待しないで下さい」

「はあ！？待てよ理人っ」

あまりの早業に呆気にとられている間に、運動不足が慢性化した俺からは信じられない速度で奴は出て行った。

ええと、つまるどころ…。

「この弟にしてあの姉あり、てどこか…？」

さすが姉弟、行動パターンが同じだ。きつと自分が与えたダメージ分、一番効果的な方法で報復して返すのdarou。まさに自業自得の無限ループだ。

「こんな時こそ、押してもダメなら引いてみる、相手も大喜びだ、

きつと」

多分それがお前のためにもなるだろうよ。用法はちょっと違う気もするが。聞かせる相手にはどうあがいても届かないと知りつつ咳かずにいられなかった。

何とも言えない脱力感を抱きつつ、コップに残っていた既にぬるまっただくなった酒を飲みほしてから席を立った。

03・03(前書き)

空腹を満たしに売店を目指す

湊は現在、司書室でお茶を飲んでいた。

売店で得たのだろうペットボトルに入った紅茶は一息で飲むには熱く、購入して間もなく湊の手に渡ったのだと考えられる。けれども最も知りたいと思う、知らなければまずいような気がする、目の前で笑う男が何を考えているのか、という疑問にはどうやっても自力で解答を導き出せずに悶々とする湊だった。

半分は自業自得とは言え慣れない説教に体を緊張させていたためか小腹を空かせた湊は校内の売店へ向かっていた。滅多に利用しないそこへの道を思い出しながら歩いていた湊は廊下を曲がる際、普段ならこの場に決していないはずの人物とぶつかってしまったのだった。

所用でこちらへ来ていたのは先ほど聞いた。けれど何故こんな時間になってまでこちらにいるのか。問いたいことが一度に溢れたせいで返って何も言えずにいた湊を知ってか知らずか、いつものように微笑んで「偶然という素晴らしい縁」だの「もう一ステップ進めよう」だのの意味のわからない変態独自曲解論を展開し始めた理人に押され、それへつつこむ気力の無かった湊は流されるまま今に至った。

湧きあがる意味のない疲労感とため息を押さえながら聞き出した諸々によると、理人はこちらの学校行事の都合で数週間はこちら側に貸し出されることになったらしい。それを聞いた湊が、暫くは図書室の利用を止めておこうと秘かに決めたのは言うまでもない。

「お茶菓子もありますから遠慮せず食べてくださいね」

にこにここと笑む理人に器に入った菓子を差し出されるが、湊は空腹を抑えて固辞する。ちゃんとした木の器に入ったこれはきつと本来の司書の私物だろうと思ったのだ。理人はそれを不思議そうに見

だが、湊が何を気にしてそう言ったか悟ると笑みを深くして言った。「大丈夫ですよ。貰い物ですが、古くなる前に食べてしまつて欲しいと言われた品ですから」

湊は自分の懸念が看破されたことに少々驚いたものの、それならと可愛らしい包み紙から飴取り出して口に含む。転がすたびに甘さを伝えるそれを味わっていると、カシヤ、という音が聞こえた。聞き覚えのある音に眉をひそめた湊は、咄嗟に手を伸ばして理人の手からカメラを取り上げた。

「湊？」

「止めてください、落ち着かないんです」

取り上げたカメラを操作して今撮られた物とついでに朝に撮られた不意打ちの一枚とを削除すると、理人が珍しく悲痛な声を上げた。

「何て事するんです湊！ああ、俺の湊コレクションが」

「何なんですかそのコレクション！…て、兄への報告用だつて言つてたの嘘なんですか！？」

予想外過ぎる言葉に思わず口の中の飴をかみ砕いた。そして残りの写真もすべて削除してしまおうとカメラを弄るも、慌ててこちらに手を伸ばしてきた理人に簡単にそれは奪われてしまった。半ば意地になった湊はそれでも諦めるまいと再びカメラへ手を伸ばすも、そうはさせまいと必死な理人は懐にカメラを収めて前身ごろをがちりと両手でかばった。

「消してください。中の写真。今すぐ」

「嫌です」

さすがに手を出すことができなくなった湊は懨然として要求する。それを突っぱねる理人との消せ、消さないと埒の無いやり取りが繰り返される。そう思ったのは理人も同じだったようで、聞き分けのない子供にい諭すように言葉を紡いだ。

「写真を義兄に送ると言うのは本当です。メールや電話で簡単に連絡が取れるとはいえ、湊のことを本当に心配していましたから普段の湊の姿を撮つて送ろうと思ったんです」

「それは…すみませんでした。でもコレクションで」

「義兄ほどではないにしろ、俺も湊のことをとても大切に思っています。それはわかっていたただけですか？」

「…方向性は別とすれば」

含むところのある歯切れの悪い湊の返答に、理人は笑顔で礼を言う。

「湊のことを心から大切だと思っけていますよ。湊のどんな一瞬だつて記憶にとどめておきたいと思っけています。この包み紙と一緒にです。放つておけばそのまま忘れ捨てられてしまっけて一瞬を写真にして残っけてるだけなんです。貴方が捨てて置っけて行っけてしまっけて一瞬の保存。貴方が捨てた物の再利用、つまりエコなんです」

「そんな趣向も再利用もいりません！この真正変態！」

いつにない熱さで弁舌をふるう理人に、けれど湊は堪え切れず怒声を上げた。

「いいえそんな。少し特殊なだけで輝かしい個性なんです」

「開き直らないで下さいド変態！」

湊は我慢の限界だ、と言わんばかりに憤慨したまま足音も荒く退室した。

ついで図書室の扉を少々乱暴に開閉した湊の背を見送り、目を戻したテーブルの上に飲みかけのペットボトルを見つけた理人は、誰もいなくなつた部屋で「やりすぎたかな」と小さくつぶやいた。

半分ほど残っけていた液体を備え付けの流しへ落とし、きっちり蓋を閉めてから購買横のゴミ箱へ行く途中で校内に予鈴が響き渡るのを聞いた。

本鈴が鳴り、担任が教室へ入つてきても未だに憤りの収まらない湊は、勝手にもてなされたとは言えごちそうになつた礼をしていなかったことに気付いた。

礼を失ってしまったことに居心地の悪さが襲つてきたものの、あの状況では仕方がなかつたと己へ言い繕う。けれども、しかし、

と反省と弁解を繰り返している間に級内の厄介事を押し付けられると決まったことに遅まきながら気づいた湊は、沈んだ気持ちさをさらに重くしたのだった。

03・03(02)(前書き)

空腹を満たしに売店を目指す

「…そう言えば、まともカメラを向けられたことってなかったっけ……」

理人が湯を使っている隙に彼に宛がった部屋へ侵入し、隠し撮りされた分の写真だけでも削除しようとカメラを操作していた湊は、己の視線が一つとしてレンズへ向けられていない写真郡に本日何度目かの溜め息を吐いたのだった。

データを確認し許容できない画像がないかチェックした湊は、結局何もせずカメラを元あった場所へ戻す。佳人のいない隙にまるで泥棒のような真似をしてしまったことへ罪悪感を抱きつつ、夕食の片づけをするべく居間へ向かった。

明かりを点けたままの居間へ入ると入浴を終えたらしい理人がそこにいた。それはいい。けれど湊は何やら見慣れない大きな器に盛られたクリームとアイスとクラッカー等の集合体、いわゆるパフェなるものを手際よく作っている男に目を丸くした。

「おや湊。どうしました？」

「それ、何してるんですか？」

湊の問いに返ったのは見たままを言葉にしたものだった。続けられた言葉に、何故理人が急にこんなものを作ったのかわかった。

「昼間のお詫びです。あんなに怒るとは思わなくて、もうしないので許してくださいませんか」

「それは…もういいですから」

湊は先ほど自分のしたこと後ろめたさを覚え、言葉に詰まりつつそう答えた。理人はそんな湊にいつもの笑みにほんの少し安堵を乗せ、立ったままの湊を椅子へ誘導した。

「では仲直りということで、どうぞ召し上がってください。味は姉の保証付きです」

そう言つてスプーンを握らされた湊は促されるまま頂上付近のアイスを一匙掬う。

「おいしい」

「お口に合つて良かった。溶ける前に食べてくださいね」

促されるまま二匙目を今度は飾りのクリームへ伸ばす。ほどよく広がるココナッツの風味に顔がほころぶ。

しかしやはり一人分には量が多いそれを、夕食後の湊には食べきれそうもなかった。作り手には申し訳ないが食べるのを手伝つてもらおうと目の前の席へ目を向けると、理人は何やら感慨深そうな瞳でもつて湊を見つめていた。

「…なんですか？」

「いえ、人類の造形美に思いをはせていたところですよ」

「は？」

「いえ、こちらの話です。さ、残りもどうぞ」

笑顔で促す理人に釈然としないものを感じつつ、湊は間食するに何かがあることを伝えた。予想外のことを言われたようにきよとんとする理人が落胆する前にフォローしつつ、できれば別けて食べてもらえないかと伺いを立てる。

湊の申し出に何も反応しない理人に、気を悪くさせてしまっただろうかと不安になった頃、理人は徐に頷きついでにこりととるけんばかりの笑みを浮かべた。

「なるほど。気付かなくてすみませんでした。今準備するので待っていて下さい」

「はあ…？」

何を準備すると言つのか。

突飛過ぎる発言に思考が追いつく前に、台所から楽しそうな理人の声が届く。

「大丈夫、ポッキーなら用意してあります」

「は？あの、そういう問題じゃないんですが」

「任せてください。イチゴ味もありますよ」

全くもって信用の置けない請け負いに啞然とする湊をよそに、理人はその手に三種類ほどのポツキーを持って戻ってきた。封を開けたそれらを器の端にぶすぶす刺し込み、出来上がったのは欠けてはいるがカラフルでかわいらしいパフェだった。

湊が未だに理人の真意を見抜けずにいると、理人は自ら刺したポツキーをたっぷりクリームが付着するようにして取り出して湊へ差し出した。

「はい、湊。あーん」

満面の笑みを浮かべる理人に、一体何をどう言えばいいのか。

怒るべきか恥ずかしがるべきか数瞬思索した末、湊は無難に己の手で食べることにした。

「…器をもつてきますから、ちゃんと取り分けて食べましょう」

残念そうな理人を見なかつたことにして食器を取りに行くべく席を離れる湊だった。

その後ねだられ粘られた末に折れた湊は理人がしたのと同じ行為をさせられた。

いつになく心労がたまっていた湊は自分の手からおいしそうにポツキーを齧る理人を、まるで兎に餌付けしているようだと思った。

徐々に短くなるそれから手を放そうとするが、いつの間にか湊の手に添えられた理人のそれに阻まれる。碌に抵抗する間もなく到達した唇に指を含まれた湊はあまりのことに瞬間言葉が出なかつた。

「ごちそうさまです。これに免じて、俺の部屋への侵入は不問にしますね」

にやりと微笑む理人へ怒るに怒れなくなつた湊は行き場のない怒りを持って余してパフェをがつつく。

アイスの個所を一度に食べて頭痛を起こした湊を、理人はただ楽しそうに見ていた。

03・03（おまけ）（前書き）

空腹を満たしに売店を目指す

03・03（おまけ）

「湊、ちゃんと見て。ここはこうです」

「…はい」

「そう、すごくいいですよ」

「……………」

「どうしました？ほら、集中して」

「…はい、あつ」

「ああ湊、デリケートなものですから、もっとやさしく、ね」

「すみません」

「ううん、難しかったですかね。お手伝いしましょうか」

「結構です。やって出来ないはずないんで、きちんとやります！」

「ふふ、そんなところも大好きですよ湊。では続きを」

「う…」

「要領は同じです。ほら、わかりますか？ここは…」

「ん？」

「そう、それを」

「ああ！」

「よくできました、湊。次に進みますか、それとも忘れないようにもう一回、します？」

「いいえ！後は自力で何とかします。ありがとうございます」

苦手な教科の課題を片付けるため、協力を乞うた相手の教え方は的確だった、とは思う。けれど正しい人選だったかと訊かれれば、一問解く間に犠牲にしたシャープペンの芯や精神への負担的な何かから察するに、適任とはとても言えなかった。

自力で問題に向き合う時よりも明らかに大きな疲労を抱え、自室に戻る湊だった。

03・03（おまけ）（後書き）

読みづらい作品に最後までお付き合いくださって、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9018s/>

変態ですか？

2011年5月4日15時40分発行